

# こころ

夏目漱石

## 上 先生と私

### 一

私はその人を常わたくしに先生と呼んでいた。

だからここでもただ先生と書くだけで

本名は打ち明けない。これは世間を憚はばかる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいなくなる。筆を執とつても心持は同じ事である。よそよそしい

かしらもじ  
頭文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになつたのは

鎌倉かまくらである。その時私はまだ若々しい

書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという

はがき

端書を受け取ったので、私は多少の金

くめん

を工面して、出掛ける事にした。私は

に

さんち

金の工面に二、三日を費やした。そこ

た

ろが私が鎌倉に着いて三日と経たない

うちに、私を呼び寄せた友達は、急に

国元から帰れという電報を受け取った。

電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに<sup>すす</sup>勧まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心<sup>かんじん</sup>の当人

が気に入らなかつた。それで夏休みに  
当然帰るべきところを、わざと避けて  
東京の近くで遊んでいたのである。彼  
は電報を私に見せてどうしようかと相談  
をした。私にはどうしていいか分らな  
かつた。けれども実際彼の母が病気で

あるとすれば彼は固<sup>もと</sup>より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分<sup>だいぶん</sup>ひかず日数があるので鎌倉におつてもよし、

帰つてもよいという境遇にいた私は、  
当分元の宿に留とまる覚悟をした。友達  
は中国のある資産家の息子でむすこ金に不自  
由のない男であつたけれども、学校が  
学校なのと年が年なので、生活の程度  
は私とそう変りもしなかった。したが



って一人ひとりぼっちになつた私は別にかつこう恰好  
な宿を探す面倒ももたなかつたのであ  
る。

宿は鎌倉でも辺鄙へんぴな方角にあつた。

玉突たまつきだのアイスクリームだのという  
ハイカラなものには長いなわて暇を一つ越さ

なければ手が届かなかった。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古

い燻<sup>くす</sup>ぶり返った藁<sup>わら</sup>葺<sup>ぶき</sup>の間<sup>あいだ</sup>を通り抜けて

磯<sup>いそ</sup>へ下りると、この辺<sup>へん</sup>にこれほどの都

会人種が住んでいるかと思うほど、避

暑に來た男や女で砂の上が動いていた。

ある時は海の中が銭湯<sup>せんとう</sup>のように黒い頭

でごちやごちやしている事もあつた。

その中に知つた人を一人ももたない私も、  
こういう賑にぎやかな景色の中に裏つま

れて、砂の上に寝ねそべつてみたり、

膝ひざ頭がしらを波に打たしてそこいらを跳はね廻まわ

るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓ざつとうの間に見付あいだ

け出したのである。その時海岸には

かけぢやや

掛茶屋が二軒あつた。私はふとした

はずみ

機会からその一軒の方に行き慣なれてい

た。長谷辺はせへんに大きな別荘を構えている

人と違って、各自めいめいに専有きの着換場えばを拵こしら

えていないここいらの避暑客には、ぜ  
ひともこうした共同着換所といった風ふう  
なものが必要なのであつた。彼らはこ  
こで茶を飲み、ここで休息する外ほかに、

ここで海水着を洗濯させたり、ここで  
鹹しおはゆい身体からだを清めたり、ここへ帽子

や傘<sup>かさ</sup>を預けたりするのである。海水着  
を持たない私にも持物を盗まれる恐れ  
はあつたので、私は海へはいるたびに  
その茶屋へ一切<sup>いっさい</sup>を脱<sup>ぬ</sup>ぎ棄<sup>す</sup>てる事にして  
いた。

わたくし

私がその掛茶屋で先生を見た時は、

先生がちょうど着物を脱いでこれから  
海へ入ろうとするとところであつた。私

はその時反対に濡れた身体からだを風に吹か

して水から上がつて来た。二人の間にあいた

は目を遮る幾多の黒い頭こゑぎが動いていた。



特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であつたにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴っれていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、  
掛茶屋へ入るや否いなや、すぐ私の注意を  
惹ひいた。純粹の日本の浴衣ゆかたを着ていた  
彼は、それを床几しょうぎの上にすぽりと放りほう  
出したまま、腕組みをして海の方を向  
いて立っていた。彼は我々の穿はく猿股さるまた

一つの外何物も肌ほかに着けていなかっただ。

私にはそれが第一不思議だった。私は

その二日前に由井ゆいが浜はままで行って、砂

の上にしゃがみながら、長い間西洋人

の海へ入る様子を眺ながめていた。私の尻しり

をおろした所は少し小高い丘の上で、

そのすぐ傍わきがホテルの裏口になつてい

たので、私の凝じつとしてゐる間あいだに、大分だいぶん

多くの男が塩を浴びに出て来たが、い

ずれも胴と腕と股ももは出してゐなかつた。

女は殊ことさら更肉を隠しがちであつた。大抵

は頭こぶに護謨ゴム製の頭巾ずきんを被かぶつて、海老茶えびちや

や紺こんや藍あいの色を波間に浮かしていた。

そういう有様を目撃したばかりの私の  
眼めには、猿股一つで済まして皆みんなの前  
に立っているこの西洋人がいかにも珍  
しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこ

にござんでいる日本人に、一言二言何

ひとことふたことなに

かいった。その日本人は砂の上に落ち

た手拭てぬぐいを拾い上げているところであつ

たが、それを取り上げるや否や、すぐ

頭を包んで、海の方へ歩き出した。そ

の人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜

辺を下りて行く二人の後姿を見守つて

うしろすがた

いた。すると彼らは真直に波の中に足

まっすぐ

を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近く

とおあさ

いそちか

にわいわい騒いでいる多人数の間を通

たにんず

あいだ

り抜けて、比較的広々した所へ来ると、

二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。

それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて着物を着て、さっさとどこへか行つて



しまった。

彼らの出て行つた後、あと私はやはり元

の床しょうぎ几に腰をおろして烟草タバコを吹かして

いた。その時私はぽかんとしながら先  
生の事を考えた。どうもどこかで見た  
事のある顔のように思われてならなか

った。しかしどうしてもいつどこで会  
った人が想い出せず<sup>おも</sup>にしまった。

その時の私は屈托<sup>くったく</sup>がないというより

むしろ無聊<sup>ぶりよう</sup>に苦しんでいた。それで

翌日<sup>あくるひ</sup>もまた先生に会った時刻を見計ら

って、わざわざ掛茶屋<sup>かけぢやや</sup>まで出かけてみ

た。すると西洋人は来ないで先生一人

むぎわらぼう

麦藁帽を被かぶってやって来た。先生は

めがね

眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ

てぬぐい

手拭で頭を包んで、すたすた浜を下り

きのう

て行った。先生が昨日のように騒がし

よくかく

い浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ

出した時、私は急にその後が追あとい掛け

たくなつた。私は浅い水を頭の上まで

跳はねかして相当の深さの所まで来て、そ

こから先生を目標めじるしに拔手ぬきでを切つた。す

ると先生は昨日と違って、一種の弧線こせん

を描えがいて、妙な方向から岸の方へ歸り

始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸<sup>おか</sup>へ上がって雫<sup>しずく</sup>の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行つた。

わたくし

私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶あいさつをする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であつた。

一定の時刻に超然として来て、また超然と歸つて行つた。周囲がいくら賑にぎやかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかつた。最初いつしよに來た西洋人はその後ごまるで姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或<sup>あ</sup>る時先生が例の通りさつさと海か  
ら上がって来て、いつもの場所に脱<sup>ぬ</sup>ぎ  
棄<sup>す</sup>てた浴衣<sup>ゆかた</sup>を着ようとすると、どうし  
た訳か、その浴衣に砂がいっぱい着い  
ていた。先生はそれを落すために、後



ろ向きになつて、浴衣を二、三度振ふるつ

た。すると着物の下に置いてあつた眼

鏡が板の隙間すきまから下へ落ちた。先生は

白しろ紺がすりの上へ兵児帯へこおびを締めてから、眼鏡

の失なくなつたのに気が付いたと見えて、

急にそこいらを探し始めた。私はすぐ

こしかけ

腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を  
拾い出した。先生は有難うといって、  
それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後あとにつづいて海へ

飛び込んだ。そうして先生といっしょ  
の方角に泳いで行つた。二丁ちょうほど沖へ

出ると、先生は後ろを振り返って私に

話し掛けた。広い蒼い海あおの表面に浮い

ているものは、その近所に私ら二人よ

り外ほかになかった。そうして強い太陽の

光が、眼の届く限り水と山とを照らし

ていた。私は自由と歓喜に充みちた筋肉

を動かして海の中で躍り狂った。先生  
はまたぱたりと手足の運動を已めて仰  
向けになったまま浪の上に寝た。私も  
その真似まねをした。青空の色がぎらぎら  
と眼を射るように痛烈な色を私の顔に  
投げ付けた。「愉快ですね」と私は大

きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といつて私を促した。比較的強い体質をもった私は、もつと海の中で遊んでいたかった。しかし先生か

ら誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜<sup>みち</sup>辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。

しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中<sup>なか</sup>二日おいてちようと三日

目の午後だったと思う。先生と掛茶屋<sup>かけぢやや</sup>

で出会った時、先生は突然私に向かつ

て、「君はまだ大分<sup>だいぶん</sup>長くここにいて、

もりですか」と聞いた。考えのない私

はこういう問いに答えるだけの用意を

頭の中に蓄えていかなかった。それで「どうだか分りません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極きこまりが悪くなつた。

「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出た先生と



いう言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と

いっても普通の旅館と違って、広い寺

の境内けいだいにある別荘のような建物であつ

た。そこに住んでいる人の先生の家族

でない事もわか解った。私が先生先生と呼

び掛けるので、先生は苦笑いをした。

くちくせ

私はそれが年長者に対する私の口癖だ  
と、いつて弁解した。私はこの間の西洋  
人の事を聞いてみた。先生は彼の風変

かまくら

りのところや、もう鎌倉にいない事や、  
色々の話をした末、日本人にさえあま

つきあい

り交際をもたないのに、そういう外国

ちかづ

人と近付きになつたのは不思議だとい

つたりした。私は最後に先生に向かつ

て、どこかで先生を見たように思ふけ

れども、どうしても思い出せないとい

あん

つた。若い私はその時暗に相手も私と

同じような感じを持っていはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟ちんぎんしたあとで、「どうも君の顔には見覚えみおぼがありませんね。人違いじゃないですか」といったので私

は変に一種の失望を感じた。

#### 四

わたくし

私は月の末に東京へ歸つた。先生の

避暑地を引き上げたのはそれよりずつ

と前であつた。私は先生と別れる時に、

たく

「これから折々お宅へ伺つても宜よござ

んすか」と聞いた。先生は単簡たんかんにただ

「ええいらつしやい」といっただけで

あつた。その時分の私は先生とよほど

懇意になつたつもりでいたので、先生

からもう少し濃こまかな言葉を予期して掛か

つたのである。それでこの物足りない

返事が少し私の自信を傷いためた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いてゐるようでもあり、また全く気が付かないようでもあつた。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために

先生から離れて行く気にはなれなかつた。むしろそれとは反対で、不安に揺うごかされるたびに、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は



若かった。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかった。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解わからなかった。それが先生の亡くなった今日こんにちになつて、始めて解つて来た。先生は始め

から私を嫌っていたのではなかったの  
である。先生が私に示した時々そっけの素気  
ない挨拶あいさつや冷淡に見える動作は、私を  
遠ざけようとする不快の表現ではなか  
ったのである。傷いたましい先生は、自分  
に近づこうとする人間に、近づくほど

の価値のないものだから止せよという警告を与えたのである。他のひと懐かしみに応じない先生は、他をひと軽蔑けいべつする前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京

へ歸つて来た。歸つてから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数ひかずがあるの  
で、そのうちに一度行つておこうと思  
つた。しかし歸つて二日三日と経たつう  
ちに、鎌倉かまくらにいた時の気分が段々薄く  
なつて来た。そうしてその上に彩いろどられ

る大都會の空氣が、記憶の復活に伴う

強い刺戟しげきと共に、濃く私の心を染め付

けた。私は往来で学生の顔を見るたび

に新しい学年に対する希望と緊張とを

感じた。私はしばらく先生の事を忘れ

た。

授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛<sup>たる</sup>みができてきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しそうに自分の室<sup>へや</sup>の中を見廻<sup>みまわ</sup>した。私の頭には再び先生  
の顔が浮いて出た。私はまた先生に会

いたくなつた。

始めて先生の宅をうち訪ねた時、先生は

留守であつた。二度目に行つたのは次

の日曜だと覚えてゐる。晴れた空が身

に沁しみ込むように感ぜられる好いい日ひ和より

であつた。その日も先生は留守であつ

た。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅たいていにいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかった私は、その言葉を思い出して、理由わけもない不満をどこかに感じた。私



はすぐ玄関先を去らなかつた。下女げじよの

顔を見て少し躊躇ちゆうちよしてそこに立ってい

た。この前名刺を取り次いだ記憶のあ

る下女は、私を待たしておいてまた内うち

へはいった。すると奥さんらしい人が

代って出て来た。美しい奥さんであつ

た。

私はその人から鄭寧ていねいに先生の出先を

教えられた。先生は例月その日になる

とぞうしがや雑司ヶ谷の墓地にある或ある仏へ花を

手向けたむけに行く習慣なのだそうです。

「たった今出たばかりで、十分になる

か、ならないかでございます」と奥さ

んは気の毒そうにいつてくれた。私は

会釈して外へ出た。えしやく賑かな町の方へ一

丁ちようほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ

谷へ行ってみる気になった。先生に会

えるか会えないかという好奇心も動い

た。それですぐ踵きびすを回めぐらした。

## 五

わたくし

私は墓地の手前なえばたけにある苗畠なえばたけの左側か

かえで

らはいって、両方に楓かえでを植え付けた広

い道を奥の方へ進んで行つた。すると

はず

ちやみせ

その端はずれに見える茶店ちやみせの中から先生ら

しい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡めがねの縁ふちが日に光るまで近く寄って行つた。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。

その言葉は森閑しんかんとした昼うちの中に異様な

調子をもつて繰り返された。私は急に

何とも応こたえられなくなつた。

「私の後あとを跟つけて来たのですか。どう

して……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情の中には判然<sup>うち</sup>いえないような一種の曇りがあった。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰<sup>だれ</sup>の墓へ参りに行つたか、妻<sup>さい</sup>がその  
人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおつしやい  
ません」

「そうですか。——そう、それはいう  
はずがありませんね、始めて会つたあ



なたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心とくしんしたらしい様子

であつた。しかし私にはその意味がまるで解わからなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の  
間を抜けた。依撒伯拉イサベラ何々の墓だ

の、神僕しんぼくロギンの墓だのという傍かたわらに、

いっさいしゅじょうしつうぶつしょう

とうば

一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが

建ててあった。全権公使何々というの

もあった。私は安得烈と彫ほり付けた小

さい墓の前で、「これは何と読むんで

しょう」と先生に聞いた。「アンドレ

とでも読ませるつもりでしょうね」と  
いって先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々  
の様式に対して、私ほどに滑稽こっけいもアイ

ロニーも認めてないらしかった。私が

丸い墓石はかいしだの細長い御影みかげの碑ひだのを指

して、しきりにかれこれいいたがるのを、始めのうちは黙って聞いていたが、しまい「あなたは死という事実をまだ真面目<sup>まじめ</sup>に考えた事がありませんね」といった。私は黙った。先生もそれぎり何ともいわなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏いちようが一

本空を隠すように立っていた。その下

へ来た時、先生は高い梢こすえを見上げて、

「もう少しすると、綺麗きれいですよ。この

木がすっかり黄葉こうようして、ここいらの地

面は金色きんいろの落葉うずで埋まるようになりま

す」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹でこぼこの地面をならして新

墓地を作っている男が、鍬くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的あてのな

い私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行  
った。先生はいつもより口数を利きかな  
かった。それでも私はさほどの窮屈を  
感じなかったもので、ぶらぶらいつしよ  
に歩いて行った。

「すぐお宅へお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙って南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利き出した。



「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。――」

「ご親類のお墓ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかつた。

私もその話はそれぎりにして切り上げ

た。すると一町ちようほど歩いた後あとで、先生  
が不意にそこへ戻つて来た。

「あすここには私の友達の墓があるん  
です」

「お友達のお墓へ毎月まいげつお参りをなさる  
んですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかつた。

## 六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅で

あつた。先生に会う度数どすうが重なるにつれて、私はますます繁しげく先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初あいさつめて挨拶をした時も、懇意になつたその後のちも、あまり変りはなかつた。先生

は何時<sup>いつ</sup>も静かであつた。ある時は静か過ぎて淋<sup>さび</sup>しいくらいであつた。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。

こういう感じを先生に対してもつていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけににはこの直感が後<sup>のち</sup>になつて事実の上  
に証拠立てられたのだから、私は若々  
しいといわれても、馬鹿<sup>ばか</sup>げていると笑

われても、それを見越した自分の直覺  
をとにかく頼もしくまた嬉うれしく思つて  
いる。人間を愛し得うる人、愛せずには  
いられない人、それでいて自分の懷ふところに  
入いろうとするものを、手をひろげて抱  
き締める事のできない人、——これが

先生であつた。

今いった通り先生は始終静かであつた。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射<sup>さ</sup>すように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。



私が始めてその曇りを先生の眉間みけんに認

めたのは、雑司ぞうしがやヶ谷の墓地で、不意に

先生を呼び掛けた時であつた。私はそ

の異様の瞬間に、今まで快く流れてい

た心臓の潮流をちよつと鈍らせた。し

かしそれは単に一時の結滞けったいに過ぎなか

った。私の心は五分と経<sup>た</sup>たないうちに  
平素の弾力を回復した。私はそれぎり  
暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。  
ゆくりなくまたそれを思い出させられ  
たのは、小春<sup>こはる</sup>の尽きるに間<sup>ま</sup>のない或<sup>あ</sup>る  
晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生が

わざわざ注意してくれた銀杏いちようの大樹たいじゆを

眼めの前に想いおも浮かべた。勘定してみる

と、先生が毎月例まいげつれいとして墓参に行く日

が、それからちょうど三日目に当って

いた。その三日目は私の課業が午ひるで終お

える楽な日であつた。私は先生に向かつてこういつた。

「先生ぞうし雑司ヶ谷の銀杏はもう散つてしまつたでしうか」

「まだ空坊主からぼうずにはならないでしう」

先生はそう答えながら私の顔を見守

った。そうしてそこからはしばし眼を離  
さなかつた。私はすぐいった。

「今度お墓参りにいらつしやる時にお

はかまい

伴をしても宜よござんすか。私は先生と

いっしょにあすこいらが散歩してみ  
たい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでの散歩をなすつたらちように好<sup>い</sup>いじゃありませんか」

先生は何とも答えなかった。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだ

けなんだから」といつて、どこまでも

ぼさん

墓参と散歩を切り離そうとする風に見

ふう

えた。私と行きたくない口実だか何だ

か、私にはその時の先生が、いかにも

子供らしくて変に思われた。私はなお

と先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでも好いからいっしょに伴っれて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」

實際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉まゆがちよつと曇つた。



眼のうちにも異様の光が出た。それは  
迷惑とも嫌悪けんおとも畏怖いふとも片付けられ  
ない微かすかな不安らしいものであつた。

私は忽ちたちま雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛

けた時の記憶を強く思い起した。二つ  
の表情は全く同じだったのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある理由があつて、他<sup>ひと</sup>といつしよにあすこへ墓参りに行きたくないのです。自分の妻<sup>さい</sup>さえまだ伴れて行つた事がないのです」

わたくし

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊たつとむべきものの一つであつた。私は

全くそのために先生と人間らしい温かい交際つきあいができたのだと思う。もし私の

好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を

繋つなぐ同情の糸は、何の容赦もなくその

時ふつりと切れてしまったろう。若い

私は全く自分の態度を自覚していなかった。たつと

それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、

どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞつとする。先生

はそれだけでなく、冷たい眼まなこで研究さ

れるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず

先生の宅うちへ行くようになった。私の足

が段々繁しげくなつた時のある日、先生は

突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のよう

なものの宅へやって来るのですか」

「何でといって、そんな特別な意味は  
ありません。——しかしお邪魔じやまなん  
ですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生の

どこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極<sup>きわ</sup>めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃<sup>ころ</sup>東京にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座す



る場合もあつたが、彼らのいずれもは  
皆みんなな私ほど先生に親しみをもつていな  
いように見受けられた。

「私は淋さびしい人間です」と先生がいつ  
た。「だからあなたの来て下さる事を  
喜んでいます。だからなぜそうたびた

び来るのかと聞いて聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳いくつですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる

ふとくようりよう

不得要領のものであつたが、私はその

そこ

時底まで押さずに歸つてしまった。し

かもそれから四日と経たないうちにま

た先生を訪問した。先生は座敷へ出る

いな

や否や笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私は外ほかの人からこういういわれたらきつ

と癩しやくに触さわつたろうと思う。しかし先生

にこういうわれた時は、まるで反対であった。癩に触らないばかりでなくかえ

って愉快だった。

「私は淋さびしい人間です」と先生はその

晩またこの間の言葉を繰り返した。

「私は淋しい人間ですが、ことによる

とあなたも淋しい人間じゃないですか。

私は淋しくつても年を取っているから、

動かずにいられるが、若いあなたはそ  
うは行かないのでしょうか。動けるだけ  
動きたいのでしょうか。動いて何かに打ぶ  
つかりたいのでしょうか……」

「私はちっとも淋さむしくはありません」  
「若いうちほど淋さむしいものはありませ

ん。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会ってもおそらくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。

私にはあなたのためにその淋しさを

根元ねもとから引き抜いて上げるだけの力が

ないんだから。あなたは外ほかの方を向い

て今に手を広げなければならなくなり

ます。今に私の宅の方へは足が向かな

くなります」



先生はこういつて淋しい笑い方をした。

## 八

幸いにして先生の予言は実現されず

さいわ

に済んだ。経験のない当時の私わたくしは、こ

の予言の中に含まれている明白な意義

うち

さえ了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行つた。その内うちいつの間にか先生の食卓で飯めしを食うようになつた。自然の結果奥さんとも口を利きかなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷

淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因げんいんかどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かつて多く働く

だけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたんびに同じ印象を受けない事はなかつた。しかしそれ以外に私はこれといつてとくに奥さんについて語るべき何物ももたない

ような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかったのだと解釈する方が正当かも知れない。

しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対してい

た。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除<sup>の</sup>ければ、つまり二人はばらばらになつていた。それで始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美し

いという外ほかに何の感じも残っていない。

ある時私は先生の宅うちで酒を飲まされ

た。その時奥さんが出て来てそば傍でしゃく酌を

してくれた。先生はいつもより愉快そ

うに見えた。奥さんに「お前も一つお

上がり」といって、自分の呑み干した

さかずき

盃を差した。奥さんは「私は……」と

辞退しかけた後、<sup>あと</sup>迷惑そうにそれを受

け取った。奥さんは綺麗<sup>きれ</sup>な眉<sup>まゆ</sup>を寄せて、

私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇

の先へ持って行つた。奥さんと先生の



間に下しものような会話が始まった。

「珍しい事。私に吞めとおっしやつた事は滅多めったにないのにね」

「お前は嫌きらいだからさ。しかし稀たまには

飲むといいよ。好いい心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。」

でもあなたは大変ご愉快ゆかいそうね、少し  
ご酒しゅを召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかし  
いつでもというわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好いい心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると  
宜<sup>よ</sup>ござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋<sup>さむ</sup>  
しくなくって好いから」

先生の宅<sup>うち</sup>は夫婦と下女<sup>げじよ</sup>だけであつた。

行くたびに大抵はひそり<sup>たいてい</sup>としていた。

高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或<sup>あ</sup>る時<sup>とき</sup>は宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていった。私は

「そうですね」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。

「一人貰もらってやろうか」と先生がいつ

た。

「貰<sup>もらい</sup>ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経<sup>た</sup>ったってできっこないよ」と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」

と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といつて高く笑った。

## 九

私の知る限り先生と奥さんとは、仲わたくしの好いい夫婦の一対いっついであつた。家庭の一員として暮した事のない私のことだか

ら、深い消息は無論解わからなかつたけれ

ども、座敷で私と対坐たいざしている時、先

生は何かのついでに、下女げじょを呼ばない

で、奥さんと呼ぶ事があつた。（奥さ

んの名は静しずといつた）。先生は「おい

静」といつでも襖ふすまの方を振り向いた。



その呼びかたが私には優やさしく聞こえた。

返事をして出て来る奥さんの様子も甚はなは

だ素直であつた。ときたまご馳走ちそうにな

つて、奥さんが席へ現われる場合など

には、この関係が一層明らかに二人の

間あいだに描えがき出されるようであつた。

先生は時々奥さんを伴<sup>つ</sup>れて、音楽会  
だの芝居だのに行<sup>つ</sup>た。それから夫婦  
づれで一週間以内の旅<sup>り</sup>行をした事も、  
私の記憶によると、二、三度以上あ<sup>つ</sup>  
た。私は箱根<sup>はこね</sup>から貰<sup>え</sup>った絵端書<sup>えはがき</sup>をまだ  
持<sup>も</sup>っている。日光<sup>にっこう</sup>へ行<sup>い</sup>った時は紅葉<sup>もみじ</sup>の

葉を一枚封じ込めた郵便も貰った。

当時の私の眼に映った先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。そのうちにたった一つの例外があつた。

ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方

でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆<sup>いさか</sup>いらしかった。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつていたので、格子<sup>こうし</sup>の前に立っていた私の耳にその言逆<sup>いさか</sup>いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそ

のうちの一人が先生だという事も、  
時々高まって来る男の方の声で解った。  
相手は先生よりも低い音おんなので、誰だ  
か判然はつきりしなかったが、どうも奥さんら  
しく感ぜられた。泣いているようでも  
あった。私はどうしたものだろうと思

つて玄関先で迷ったが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ帰った。

妙に不安な心持が私を襲つて来た。

私は書物を読んでも呑<sup>の</sup>み込む能力を失ってしまった。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。

私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといつて、下から私を誘つた。

先刻帯の間へ包さつきくるんだままの時計を出し

て見ると、もう八時過ぎであつた。私

は歸つたなりまだ袴はかまを着けていた。私

はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といつしよに麦酒<sup>ビール</sup>を

飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目<sup>だめ</sup>です」といって先生は苦



笑した。

「愉快になれませんか」と私は気の毒  
そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻さつきの事が引ひつ  
懸かっていた。肴さかなの骨が咽喉のどに刺さった  
時のように、私は苦しんだ。打ち明け

てみようかと思えたり、止よした方が好よかろうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかつた。

「実は先刻妻と少し喧嘩さつきさい けんかをしてね。そ

れで下くだらない神経を昂奮こうふんさせてしまつ

たんです」と先生がまたいった。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来

なかつた。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといって聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これでも私には想像の及ばない問題であつ

た。

十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が  
一丁も二丁もつづいた。ちようその後で突然  
先生が口を利きき出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻はさい

さぞ心配をしているだろう。考えると

女は可哀かわいそうなものですね。わたくし私の妻な

どは私より外ほかにまるで頼りにするもの

がないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切とぎれ

たが、別に私の返事を期待する様子も

なく、すぐその続きへ移って行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈

夫のようで少し滑稽こっけいだが。君、私は君

の眼にどう映りますかね。強い人に見

えますか、弱い人に見えますか」

「中位ちゅうぐらいに見えます」と私は答えた。こ



の答えは先生にとって少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅<sup>うち</sup>へ帰るには私の下宿のつい

傍<sup>そば</sup>を通るのが順路であつた。私はそこ

まで来て、曲り角で分れるのが先生に

済まないような気がした。「ついでに  
お宅たくの前までお伴ともしましょうか」とい  
った。先生は忽ち手たちまで私を遮さえぎった。

「もう遅いから早く帰りたまえ。私も  
早く帰ってやるんだから、妻君さいくんのた  
めに」

先生が最後に付け加えた「妻君のため」——という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰ってから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君のため」——という言葉をお忘れなかった。

先生と奥さんの間に起つた波瀾が、

はらん

大したものでもない事はこれでも解わかつた。

それがまた滅多めったに起る現象でなかつた

事も、その後絶えず出で入いりをして来た

私にはほぼ推察ができた。それどころ

か先生はある時こんな感想すら私に洩も

らした。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻さい以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう

意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間のいっつい一対であるべきはず  
です」

私は今前後の行き掛りゆがを忘れてしま  
ったから、先生が何のためにこんな自  
白を私にして聞かせたのか、判然はつきりい

事ができない。けれども先生の態度の  
真面目<sup>まじめ</sup>であつたのと、調子の沈んでい  
たのとは、いまだに記憶に残っている。  
その時ただ私の耳に異様に響いたのは、  
「最も幸福に生れた人間の一対である  
べきはずです」という最後の一句であ

った。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきはずであると断わったのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であつた。先生は事実にはたして幸福なのだろうか、また幸



福であるべきはずでありながら、それ  
ほど幸福でないのだろうか。私は心の  
中<sup>うち</sup>で疑<sup>うたぐ</sup>らざるを得なかった。けれども  
その疑いは一時限りどこかへ葬<sup>ほうむ</sup>られて  
しまった。

私はそのうち先生の留守に行つて、

さしむか

奥さんと二人差向いで話をする機会に

よこはま しゅっぱん

出合った。先生はその日横浜を出帆す

る汽船に乗って外国へ行くべき友人を

しんばし

新橋へ送りに行つて留守であつた。横

浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車

ころ

で新橋を立つのはその頃の習慣であつ

た。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義れいぎとしてその日突然起つた出来事であつた。

先生はすぐ帰るから留守でも私に待っているようにといい残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話をした。

## 十一

その時の私わたくしはすでに大学生であつた。

始めて先生の宅うちへ来た頃ころから見るとず

っと成人した気でいた。奥さんとも

大分だいぶん懇意こんいになった後のちであつた。私は奥

さんに対して何の窮屈きやうくつも感じなかつた。

差向さしむかいで色々の話をした。しかしそれ

は特色のないただの談話だから、今で

はまるで忘れてしまった。そのうちで  
たった一つ私の耳に留まったものがあ  
る。しかしそれを話す前に、ちよつと  
断っておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始  
めから私に知れていた。しかし先生の

何もしないで遊んでいるという事は、  
東京へ帰って少し経<sup>た</sup>ってから始めて分  
った。私はその時どうして遊んでいら  
れるのかと思った。

先生はまるで世間に名前を知られて  
いない人であつた。だから先生の学問

や思想については、先生と密切みっせつの関係

をもっている私より外ほかに敬意を払うも

のあるべきはずがなかった。それを

私は常に惜おしい事だといった。先生は

また「私のようなものが世の中へ出て、

口きを利きいては済まない」と答えるぎり



で、取り合わなかった。私にはその答えが謙遜過けんそんぎてかえって世間を冷評するようにも聞こえた。実際先生は時々昔の同級生で今著名になっている誰彼だれかれを捉とらえて、ひどく無遠慮な批評を加える事があった。それで私は露骨にその

うんぬん

矛盾を挙げて云々してみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕

方がありません」といった。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解<sup>わか</sup>らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう

勇気が出なかった。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えた  
り勉強したりなさるだけで、世の中へ

出て仕事をなさらないんでしよう」

「あの人は駄目だめですよ。そういう事が

嫌いなんですから」

「つまり下らくだない事だと悟さつていらつ

しやるんでしょうか」

「悟るの悟らないのって、——そりや

女だからわたくしには解りませんけれど、おそろくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょう。それでいてできないんです。

だから気の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいって、別に

どこも悪いところはないようじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解<sup>わか</sup>らないのよ、あなた。それが解<sup>わか</sup>るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけには微笑が見えた。



た。外側からいえば、私の方がむしろ  
真面目<sup>まじめ</sup>だった。私はむずかしい顔をし  
て黙っていた。すると奥さんが急に思  
い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんで  
すよ。若い時はまるで違っていました。

それが全く変ってしまっただんです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらっしやっただんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。

## 十二

奥さんは東京の人であつた。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは「本当いあいと合の子こなんですよ」といった。奥さ

とつとり

んの父親はたしか鳥取かどこかの出で  
あるのに、お母さんの方はまだ江戸と  
いった時分じぶんの市ヶ谷いちがやで生れた女なので、  
奥さんは冗談半分そういつたのである。  
ところが先生は全く方角違いの新潟県にいがた  
人であつた。だから奥さんがもし先生

の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであった。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだった。たので、私の方でも深くは聞かずに聞いた。

先生と知り合いになってから先生の  
亡くなるまでに、私はずいぶん色々の  
問題で先生の思想や情操に触れてみた  
が、結婚当時の状況については、ほと  
んど何ものも聞き得なかった。私は時  
によると、それを善意に解釈してもみ

た。年輩の先生の事だから、艶めかしなま

い回想などを若いものに聞かせるのは  
わざと慎つつしんでいるのだろうと思った。

時によると、またそれを悪くも取った。  
先生に限らず、奥さんに限らず、二人  
とも私に比べると、一時代前の因襲の

うちに成人したために、そういう艶つやつ

ぽい問題になると、正直に自分を開放  
するだけの勇気がないのだろうと考え  
た。もつともどちらにも推測に過ぎなか  
った。そうしてどちらの推測の裏にも、  
二人の結婚の奥に横たわる花やかな口



マンスの存在を仮定していた。

私の仮定ははたして誤らなかつた。

けれども私はただ恋の半面だけを想像  
に描き得たに過ぎなかつた。<sup>えが</sup>先生は美

しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つ  
ていた。そうしてその悲劇のどんなに

先生にとって見<sup>み</sup>惨<sup>じめ</sup>なものであるかは相

手の奥さんにまるで知れていなかった。

奥さんは今でもそれを知らずにいる。

先生はそれを奥さんに隠して死んだ。

先生は奥さんの幸福を破壊する前に、

まず自分の生命を破壊してしまった。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先刻さつきいった通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつた。奥さんは慎みのために、先生はまたそ

れ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残っている事が

ある。或る時<sup>あ</sup>花時分に私は先生といっ

しよに上野<sup>うえの</sup>へ行つた。そうしてそこで

美しい一対<sup>いつつい</sup>の男女<sup>なんによ</sup>を見た。彼らは睦<sup>むつ</sup>ま

じそうに寄り添って花の下を歩いてい

た。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙そばだてている人が沢山あつた。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいった。

「仲が好よさそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかった。二人の男女を視線の外に置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」  
私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、ひやか冷評しま

したね。ひやかしあの冷評のうちには君が恋を

求めながら相手を得られないという不快の聲が交まじっていきましょう」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪です。」



すよ。解<sup>わか</sup>つていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

### 十三

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉<sup>うれ</sup>しそうな顔をしていた。そこを

通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私<sup>わたくし</sup>がその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の

先生の語気は前と同じように強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動い

ているじゃありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。  
けれどもそこは案外に空虚であつた。

思いあたるようなものは何にもなかつた。

「私の胸の中にこれという目的物は一

つもあります。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思つて動きたくないのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上るのぼ階段かいだんなんです。異性と抱き

合う順序として、まず同性の私の所へ

動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことに  
しているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうし  
てもあなたに満足を与えられない人間  
なのです。それから、ある特別の事情

があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。

私はむしろそれを希望しているのです。しかし………」



私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお願いになれば仕方ありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、――

君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実  
としては知らなかった。いずれにして  
も先生のいう罪悪という意味は朦朧と  
してよく解<sup>わか</sup>らなかった。その上私は少  
し不愉快になった。

「先生、罪悪という意味をもつと判然<sup>はつきり</sup>

いって聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実をまこと話している気でいた。ところが実際は、

あなたを焦慮<sup>じら</sup>していたのだ。私は悪い  
事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯溪<sup>うぐいすだに</sup>の

方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣

の隙間<sup>すきま</sup>から広い庭の一部に茂る熊笹<sup>くまざさ</sup>が

幽邃<sup>ゆうすい</sup>に見えた。

「君は私がなぜ毎月まいげつ雑司ぞうしヶ谷がやの墓地に  
埋うまっている友人の墓へ参るのか知って  
いますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。  
しかも先生は私がこの問いに対して答  
えられないという事もよく承知してい

た。私はしばらく返事をしなかった。

すると先生は始めて気が付いたように  
こういった。

「また悪い事をいった。焦慮じらせるのが

悪いと思つて、説明しようとする、

その説明がまたあなたを焦慮せるよう

な結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めやましよう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

私には先生の話がますます解わからなくなつた。しかし先生はそれぎり恋を口



にしなかつた。

## 十四

年の若い私は<sup>わたくし</sup>ややともすると一<sup>いち</sup>図<sup>ず</sup>に

なりやすかつた。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益

なのであつた。教授の意見よりも先生  
の思想の方が有難いのであつた。とど  
の詰まりをいえば、教壇に立つて私を  
指導してくれる偉い人々よりもただ独ひと  
りを守って多くを語らない先生の方が  
偉く見えたのであつた。

「あんまり逆上のぼせしちゃいけません」と先生がいった。

「覚さめた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯うけがってくれなかった。

「あなたは熱に浮かされているのです。  
熱がさめると厭いやになります。私は今の  
あなたからそれほどに思われるのを、  
苦しく感じています。しかしこれから  
先のあなたに起るべき変化を予想して  
見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」  
「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。

その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぽたぽた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用

しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生垣いけがきの向うで金魚売りらしい

声がした。その外ほかには何の聞こえるも

のもなかった。大通りから二丁ちようも深く

折れ込んだ小路こうじは存外ぞんがい静かであつた。

家<sup>うち</sup>の中はいつもの通りひっそりしてい

た。私は次の間<sup>ま</sup>に奥さんのいる事を知

っていた。黙って針仕事か何かしてい

る奥さんの耳に私の話し声が聞こえる

という事も知っていた。しかし私は全

くそれを忘れてしまった。



「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していけないのです。つまり自分で自分が信用できない

から、人も信用できないようになって  
いるのです。自分を呪<sup>のろ</sup>うより外<sup>ほか</sup>に仕方が  
ないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だって  
確かなものはないでしょう」

「いや考えたんじゃない。やったんで

す。やった後で驚いたんです。そうして非常に怖こわくなつたんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿たどって

行きたかつた。すると襖ふすまの陰で「あな

た、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」

といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間<sup>ま</sup>へ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解<sup>わか</sup>らなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ歸つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺あざむかれた返報に、残酷な復讐ふくしゅうをするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝ひざの前に跪ひざまずいたと

いう記憶が、今度はその人の頭の上に  
足を載<sup>の</sup>せさせようとするのです。私は  
未来の侮辱を受けないために、今の尊  
敬を斥<sup>しりぞ</sup>けたいと思うのです。私は今よ  
り一層淋<sup>さび</sup>しい未来の私を我慢する代り  
に、淋しい今の私を我慢したいのです。

自由と独立と己おのれとに充みちた現代に生  
れた我々は、その犠牲としてみんなこ  
の淋しみを味わわなくてはならないで  
しょう」

私はこういう覚悟をもっている先生  
に対して、  
いうべき言葉を知らなかつ

た。

## 十五

その後私は奥さんづわたくしの顔を見るたびに

気になった。先生は奥さんに対しても  
始終こういう態度に出るのだろうか。

もしそうだとすれば、奥さんはそれで



満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極<sup>き</sup>めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であつたから。最後に先生のいる

席でなければ私と奥さんとは滅多にめった顔を合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。

先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした

結果なのだろうか。先生は坐すわつて考え

る質たちの人であつた。先生の頭さえあれ

ば、こういう態度は坐つて世の中を考

えていても自然と出て来るものだろう

か。私にはそうばかりとは思えなかつ

た。先生の覚悟は生きた覚悟らしかつ

せきぞう

た。火に焼けて冷却し切った石造家屋  
の輪廓りんかくとは違っていた。私の眼に映ず

る先生はたしかに思想家であつた。け

れどもその思想家の纏まとめ上げた主義の

裏には、強い事実が織り込まれている  
らしかった。自分と切り離された他人

の事実でなくって、自分自身が痛切に  
味わった事実、血が熱くなったり脈が  
止まったりするほどの事実が、畳み込  
まれているらしかった。

これは私の胸で推測するがものはな  
い。先生自身すでにそうだと告白して

いた。ただその告白が雲の峯みねのようで

あった。私の頭の上に正体の知れない

恐ろしいものを蔽おおい被かぶせた。そうして

なぜそれが恐ろしいか私にも解わからなか

った。告白はぼうとしていた。それで

いて明らかに私の神経を震ふるわせた。

私は先生のこの人生觀の基点に、或<sup>あ</sup>る強烈な恋愛事件を仮定してみた。  
(無論先生と奥さんとの間に起った)。

先生がかつて恋は罪惡だといった事から照らし合せて見ると、多少それが手掛<sup>てが</sup>りにもなった。しかし先生は現に

奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭世えんせいに近い覺悟が出ようはずがなかった。「かつてはその人の前に跪ひざまずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとする」といった先生の言葉は、



現代一般の誰彼たれかれについて用いられるべ

きで、先生と奥さんの間には当てはまらないものようでもあつた。

雑司ぞうしがやヶ谷にある誰だだれか分らない人の

墓、——これも私の記憶に時々動いた。

私はそれが先生と深い縁故のある墓だ

という事を知っていた。先生の生活に  
近づきつつありながら、近づく事ので  
きない私は、先生の頭の中にある生命<sup>いのち</sup>  
の断片として、その墓を私の頭の中  
にも受け入れた。けれども私に取ってそ  
の墓は全く死んだものであつた。二人

の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはな  
らなかつた。むしろ二人の間に立って、  
自由の往来を妨げる魔物のようであつ  
た。

そうこうしているうちに、私はまた  
奥さんと差し向いで話をしなければな

らない時機が来た。その頃は日ころの詰つまつ

て行くせわしない秋に、誰も注意を惹ひ

かれる肌寒はださむの季節であつた。先生の

附近ふきんで盗難に罹かかつたものが三、四日続

いて出た。盗難はいずれも宵の口であ

つた。大したものを持つて行かれた家うち

はほとんどなかつたけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空<sup>あ</sup>けなければならぬ事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京した

ため、先生は外の二、三名と共に、あ  
る所でその友人に飯めしを食わせなければ  
ならなくなつた。先生は訳を話して、  
私に帰ってくる間までの留守番を頼ん  
だ。私はすぐ引き受けた。

わたくし

私の行ったのはまだ灯ひの点つくか点か

ない暮れ方であつたが、几帳面きちようめんな先生

はもう宅うちにいなかった。「時間に後おくれ

ると悪いって、つい今しがた出掛けま

した」といった奥さんは、私を先生の

書齋へ案内した。

書齋には洋机テーブルと椅子いすの外ほかに、沢山の

書物が美しい背皮せがわを並べて、硝子ガラス越こしに

電燈でんとうの光で照らされていた。奥さんは

火鉢の前に敷いた座蒲団ざぶとんの上へ私を坐すわ

らせて、「ちつとそこいらにある本で

も読んでいて下さい」と断って出て行



った。私はちようど主人の歸りを待ち受ける客のような気がして済まなかつた。私は畏かしこまつたまま烟草タバコを飲んでゐた。奥さんが茶の間で何か下女げじよに話している声が聞こえた。書齋は茶の間の縁側を突き当って折れ曲つた角かどにある

ので、棟むねの位置からいうと、座敷より

もかえって掛け離れた静かさを領りょうして

いた。ひとしきりで奥さんの話し声が

已やむと、後あとはしんとした。私は泥棒を

待ち受けるような心持で、凝じっとしなが

ら気をどこかに配った。

三十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。「おや」といって、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に来た人のように鹿爪しかづめらしく控えている私をおかしそうに見た。

「それじゃ窮屈でしょう」

「いえ、窮屈じゃありません」

「でも退屈でしょう」

「いいえ。泥棒が来るかと思って緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちやぢやわんを持ったまま、

笑いながらそこに立っていた。

「ここは隅っこだから番をするには好<sup>よ</sup>くありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。<sup>ちようだい</sup>ご退屈<sup>たいくつ</sup>だろうと思つて、お茶

を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜<sup>よろ</sup>しければあちらで上げますから」

私は奥さんの後あとに尾ついて書齋を出た。

茶の間には綺麗きれいな長火鉢ながひばちに鉄瓶てつびんが鳴つ

ていた。私はそこで茶と菓子ちそうのご馳走

になった。奥さんは寝ねられないといけ

ないといつて、茶碗に手を触れなかつ

た。

「先生はやっぱり時々こんな会へお  
出掛でけになるんですか」

「いいえ滅多めったに出た事はありません。

近頃ちかごろは段々人の顔を見るのが嫌きらいにな  
るようです」

こういった奥さんの様子に、別段困

ったものだという風ふうも見えなかったの  
で、私はつい大胆になった。

「それじゃ奥さんだけが例外なん  
ですか」

「いいえ私も嫌われている一人なん  
です」



「そりや嘘うそです」と私がいった。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしよう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんです

もの」

「あなたは学問をする方<sup>かた</sup>だけあつて、

なかなかお上手<sup>じょうず</sup>ね。空<sup>から</sup>っぽな理屈を使

いこなす事が。世の中が嫌いになつた

から、私までも嫌いになつたんだとも

いわれるじゃありませんか。それと同<sup>おん</sup>

なじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、  
この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だ  
けなさるのね、面白そうに。空の盃から さかずきで

よくああ飽きずに献酬けんしゅうができると思い

ますわ」

奥さんの言葉は少し手痛てひどかった。し

かしその言葉の耳障みみざわりからいうと、決し

て猛烈なものではなかった。自分に頭

脳のある事を相手に認めさせて、そこ

に一種の誇りを見出みいだすほどに奥さんは

現代的でなかった。奥さんはそれよりもっと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。

## 十七

私はまだその後わたくしにいうべき事をもつあとていた。けれども奥さんから徒らいたずらに議

論を仕掛ける男のように取られては困  
ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干  
した紅茶茶碗こうちやぢやわんの底を覗のぞいて黙っている  
私を外そらさないように、「もう一杯上  
げましようか」と聞いた。私はすぐ茶  
碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？

一つ？

二ツつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数かずを聞いた。奥さんの態度は私に媚こびるといふほどではなかったけれども、先刻さつきの強い言葉を力つとめて打

ち消そうとする愛嬌あいきょうに充みちていた。

私は黙って茶を飲んだ。飲んでしま  
つても黙っていた。

「あなた大変黙り込んじまったのね」  
と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなん



て、叱り付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒口いとくちにまた話を始めた。

そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しわ

せて下さいませんか。奥さんには空からな

理屈と聞こえるかも知れませんが、私

はそんな上うわの空そらでいつてゐる事じゃない

んだから」

「じゃおっしやい」

「今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外ほかに仕方がないじやありませんか。私の所へ持つ

て来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真面目まじめですよ。だから

逃げちゃいけません。正直に答えなく  
つちや」

「正直よ。正直にいつて私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらつしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺つていい質問ですから、あなたに伺います」

「何もそんな事を開き直つて聞かなくつても好<sup>い</sup>いじゃありませんか」

「真面目くさって聞くがものはない。  
分り切つてるとおっしゃるんですか」  
「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急  
にいなくなったら、先生はどうなるん  
でしょう。世の中のどっちを向いても

面白そうでない先生は、あなたが急に  
いなくなったら後でどうなるでしょう。  
先生から見てもじゃない。あなたから見  
てですよ。あなたから見ても、先生は幸  
福になるでしょうか、不幸になるで  
しょうか」

「そりゃ私から見れば分っています。

（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんか。そういうと、おのぼれ己惚になるようですが、私は今先生を



人間としてできるだけ幸福にしている  
んだと信じていますわ。どんな人があ  
つても私ほど先生を幸福にできるもの  
はないとまで思い込んでいますわ。そ  
れだからこうして落ち付いていられる  
んです」

「その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思いますが」

「それは別問題ですわ」

「やっぱり先生から嫌われていとおっしゃるんですか」

「私は嫌われてるとは思いません。嫌

われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしよう。世間というより近頃では人間が嫌いになつてちかごろいるんでしよう。だからその人間の一人いちにんとして、私も好かれるはずがないじゃないありませんか」

奥さんの嫌われているという意味が  
やつと私に呑<sup>の</sup>み込めた。

## 十八

私<sup>わたくし</sup>は奥さんの理解力に感心した。奥  
さんの態度が旧式の日本の女らしくな  
いところも私の注意に一種の刺戟<sup>しげき</sup>を与

えた。それで奥さんはその頃流行り始<sup>ころは</sup>めた。いわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際<sup>つきあい</sup>をした

経験のない迂闊<sup>うかつ</sup>な青年であつた。男と

しての私は、異性に対する本能から、

憧憬<sup>どうけい</sup>

の目的物として常に女を夢みてい

た。けれどもそれは懐かしい春の雲を

眺<sup>なが</sup>めるような心持で、ただ漠然<sup>ぼくぜん</sup>と夢み

ていたに過ぎなかった。だから実際の

女の前へ出ると、私の感情が突然変る

事が時々あった。私は自分の前に現わ

れた女のために引き付けられる代りに、

その場に臨んでかえって変な反撥力を

はんぱつりよく

感じた。奥さんに対した私にはそんな

気がまるで出なかった。普通男女の間

なんによ

に横たわる思想の不平均という考えも

ほとんど起らなかった。私は奥さんの

女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのだらうと  
いって、あなたに聞いた時に、あなた



はおっしやった事がありますね。元は  
ああじゃなかったんだって」

「ええいいました。実際あんなじゃな  
かったんですもの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私

の希望するような頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」

「奥さんはその間あいだ始終先生といっしょにいらしたんでしよう」

「無論いしましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう変って行かれる原因げんいんがちやんと解わかるべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそ

ういわれると実に辛い<sup>つら</sup>んですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何<sup>なん</sup>遍<sup>べん</sup>あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合つてくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切<sup>とぎ</sup>らした。下女<sup>げじよ</sup>部屋に<sup>や</sup>いる下女はこ

とりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいつて下さい。そう  
思われるのは身を切られるより辛いん  
だから」と奥さんがまたいった。「こ  
れでも私は先生のためにできるだけの  
事はしているつもりなんです」

「そりゃ先生もそう認めていられるん

だから、大丈夫です。ご安心なさい、  
私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻かき馴ならした。

それから水注みずさしの水を鉄瓶てつびんに注さした。鉄

瓶は忽たちまち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防しんぼうし切れなくなつて、



先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点なら改めるからって、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。そういわれると、私悲しくなっ

て仕様がないうです、涙が出てなお  
の事自分の悪い所が聞きたくなるん  
です」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜め  
た。

始め私わたくしは理解のある女性によしようとして奥さ

んに対していた。私がその気で話して

いるうちに、奥さんの様子が次第に変

って来た。奥さんは私の頭脳に訴える

代りに、私の心臓ハートを動かし始めた。自

分と夫の間には何の蟠わだかまりもない、ま

たないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開あけて見極みきわめようとすると、やはり何なんにもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼えんが厭えん世的だせいから、その結果として自分

も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中生まで厭いやになったのだろうと推測してい

た。けれどもどう骨を折つても、その  
推測を突き留めて事実とする事ができ  
なかつた。先生の態度はどこまでも  
良人おつとらしかつた。親切で優しかつた。

疑いの塊かたまりをその日その日の情合じょうあいで包  
んで、そつと胸の奥にしまつておいた

奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思つて？」と聞いた。

「私からああなつたのか、それともあなたのいう人<sup>じんせい</sup>世<sup>いかん</sup>観とか何とかいうものから、ああなつたのか。隠さずいつて

ちょうだい  
頂戴」

私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとするば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私



の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解わかりません」

奥さんは予期の外はずれた時に見る憐あわれ

な表情をその咄とつ嗟さに現あらわした。私はす

ぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌っていらつ  
しやらない事だけは保証します。私は  
先生自身の口から聞いた通りを奥さん  
に伝えるだけです。先生は嘘うそを吐つかな  
い方かたでしよう」

奥さんは何とも答えなかつた。しば

らくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになつた源げん因いんについてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、

私の責任だけはなくならんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、  
……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい渋って膝ひざの上に置いた

自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すって。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱しかられないところだけよ」

私は緊張して唾液つばきを呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲  
の好いいお友達が一人あったのよ。その  
方かたがちょうど卒業する少し前に死んだ  
んです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語ささやくような小さ

な声で、「実は変死したんです」とい  
った。それは「どうして」と聞き返さ  
ずにはいられないようないい方であつ  
た。

「それっ切りしかいえないのよ。けれ  
どもその事があつてから後<sup>のち</sup>なんです。

先生の性質が段々變つて來たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて來たと思えば、そう思われない事もないのよ」



「その人の墓ですか、  
雑司ぞうしヶ谷がやにある  
のは」

「それもいわない事になってるからい  
いません。しかし人間は親友を一人亡  
くしただけで、そんなに変化できるも  
のでしょうか。私はそれが知りたくつ

て堪<sup>たま</sup>らないんです。だからそこを一つ  
あなたに判断して頂きたいと思うの」  
私の判断はむしろ否定の方に傾いて  
いた。

## 二十

私<sup>わたくし</sup>は私のつらまえた事実の許す限り、

奥さんを慰めようとした。奥さんもまたできるだけ私によつて慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私はもともと事の大根をおおね攫つかんでいなかつた。奥さんの不安も実はそこに漂ただよう薄い雲

に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事ができなかつた。<sup>すっかり</sup>したがって慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらし

ていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、おぼつか覚束ない私の判断に縋すがり付こうとした。

十時頃ごろになって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐すわってい

る私をそつちのけにして立ち上がった。

そうして格子こうしを開ける先生をほとんど

出で合あい頭がしらに迎えた。私は取り残されな

がら、後あとから奥さんに尾ついて行つた。

下女げじよだけは仮寝うたたねでもしていたとみえて、

ついに出て来なかつた。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまつた涙の光と、それから黒い眉毛まゆげの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く

眺<sup>なが</sup>めた。もしそれが詐<sup>いつわ</sup>りでなかったな

らば、（実際それは詐りとは思えな

かったが）、今までの奥さんの訴えは

感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵<sup>こしら</sup>

センチメントもてあそ

えた、徒<sup>いたず</sup>らな女性の遊戯と取れない事

もなかった。もつともその時の私には



奥さんをそれほど批評的に見る気は起  
らなかった。私は奥さんの態度の急に  
輝いて来たのを見て、むしろ安心した。  
これならばそう心配する必要もなかつ  
たんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦勞さ

ま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合はりあいが抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰つぶさせて気の毒だという

よりも、せつかく来たのに泥棒がはい  
らなくって気の毒だという冗談のよう  
に聞こえた。奥さんはそういいながら、  
先刻出<sup>さつき</sup>した西洋菓子<sup>さつき</sup>の残りを、紙に包  
んで私の手に持たせた。私はそれを袂<sup>たもと</sup>  
へ入れて、人通りの少ない夜寒<sup>よさむ</sup>の小路<sup>こうじ</sup>

を曲折して賑にぎやかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽ひ

き抜いてここへ詳くわしく書いた。これは

書くだけの必要があるから書いたのだ

が、実をいうと、奥さんに菓子もらを貰っ

て帰るときの気分では、それほど当夜

の会話を重く見ていなかった。私はそ

よくじつひるめし

の翌日午飯を食いに学校から帰ってき

て、昨夜机の上に載のせて置いた菓子ゆうべの

包みを見ると、すぐその中からチョコ

レートとびいろを塗った鳶色のカステラを出し

ほおば

て頬張った。そうしてそれを食う時に、

ひつぎよう

必竟ひつぎようこの菓子を私にくれた二人の男女なんによ

は、幸福な一対いっついとして世の中に存在し

ているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事も

なかった。私は先生の宅うちへ出ではいりを

するついでに、衣服あらの洗い張りはや仕立した

て方<sup>かた</sup>などを奥さんに頼んだ。それまで

繻<sup>じゅばん</sup>絆<sup>ばん</sup>というものを着た事のない私が、

シャツの上に黒い襟のかかったものを

重ねるようになったのはこの時からで

あった。子供のない奥さんは、そうい

う世話を焼くのがかえって退屈<sup>たいくつ</sup>凌<sup>しの</sup>ぎに

なつて、けつくからだ結句身体の薬だぐらいの事を  
いつていた。

「こりや手てお織りね。こんな地じの好い着

物は今まで縫った事がないわ。その代

り縫いにく悪いのよそりやあ。まるで針が

立たないんですもの。お蔭かげで針を二本



折りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒めんどうくさいという顔をしなかつた。

## 二十一

冬が来た時、私わたくしは偶然国へ帰らなけ

ればならない事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓<sup>じんぞう</sup>を病んでいた。

中年以後の人にしばしば見る通り、父  
のこの病は慢性<sup>やまい</sup>であつた。その代り要

心さえしていれば急変のないものと当  
人も家族のものも信じて疑わなかつた。

現に父は養生のお蔭<sup>かげ</sup>一つで、今日<sup>こんにち</sup>まで

どうかこうか凌しのいで来たように客が来

ると吹聴ふいちようしていた。その父が、母の書

信によると、庭へ出て何かしている機はずみ

に突然眩暈めまいがして引ッ繰り返った。

家内かないのものは軽症の脳溢血のういつけつと思い違え

て、すぐその手当をした。後あとで医者か

らどうもそうではないらしい、やはり  
持病の結果だろうという判断を得て、  
始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考  
えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間まがあつ  
た。私は学期の終りまで待っていても

さしつか

差支えあるまいと思つて一日二日その  
ままにしておいた。するとその一日二  
日の間に、父の寝ている様子だの、母  
の心配している顔だのが時々眼に浮か  
んだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗な  
めた私は、とうとう帰る決心をした。

国から旅費を送らせる手数料と時間を省くため、私は暇乞いとまぎいかたがた先生の所へ行つて、要いるだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪かぜの気味で、座敷へ出るのが臆おっくう劫だといつて、私をその書齋

に通した。書斎の硝子戸ガラスどから冬に入いつ

て稀まれに見るような懐かしい和やわらかな日

光が机掛つくえかけの上に射さしていた。先生は

この日あたりの好い室へやの中へ大きな火

鉢を置いて、五徳ごとくの上に懸けた金盥かなだらか

ら立あがち上る湯気ゆげで、呼い吸きの苦しくなる



のを防いでいた。

「大病は好<sup>い</sup>いが、ちよつとした風邪<sup>かぜ</sup>な

どはかえつて厭<sup>いや</sup>なものですね」といつ

た先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のな

い人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなつた。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病気は眞平まっぴらです。先生だつて同じ事でしよう。試みにやつてご覧

になるとよく解わかります」

「そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹<sup>か</sup>りたいと思ってる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかった。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりゃ困るでしょう。そのくらいな

ら今手元にあるはずだから持つて行き  
たまえ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額  
を私の前に並べさせてくれた。それを

奥の茶箆ちやだんす筒か何かの抽出ひきだしから出して来

た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧ていねいに重

ねて、「そりゃご心配ですね」といつた。

「何遍なんべんも卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。  
——そんなに何度も引ッ繰り返るもの

ですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなったのだという事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私

がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いいが。——嘔はきけ気はあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、  
大方おおかたないんでしょう」

「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立った。

## 二十二

父の病気は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床とこの上に



あぐら

胡坐をかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じつとしている。

なにもう起きてもいいのさ」といった。

しかしその翌日よくじつからは母が止めるのも

聞かずに、とうとう床を上げさせてし

まった。母は不承無性ふしょうぶしょうに太織ふとおりの蒲団ふとん

を畳みながら「お父さんはお前が帰つて来たので、急に気が強くおなりなんだよ」といった。わたくし私には父の挙動がさして虚勢を張っているようにも思えなかつた。

私の兄はある職を帯びて遠い九州に

いた。これは万一の事がある場合でな

ければ、容易に父母ちちははの顔を見る自由の

利きかない男であつた。妹は他国へ嫁とい

だ。これも急場の間に合うように、お

いそれと呼び寄せられる女ではなかつ

た。兄妹きょうだい三人のうちで、一番便利なの

はやはり書生をしている私だけであつた。その私が母のいい付け通り学校の課業を放り出<sup>ほう</sup>して、休み前に歸つて来たという事が、父には大きな満足であつた。

「これしきの病気に学校を休ませては

気の毒だ。お母さんがあまり仰山ぎょうさんな手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういった。こういったばかりでなく、今まで敷とこいていた床を上げさせて、いつものような元気を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回ぶりかえす  
といけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしか  
し極きわめて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように  
要心ようじんさえしていれば」

実際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈めまいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのです、私たちは格別それを気に留めなかった。

おんしやく

私は先生に手紙を書いて恩借の礼を述べた。正月上京する時に持参するか  
らそれまで待つてくれるようにと断わ  
った。そうして父の病状の思つたほど  
険悪でない事、この分なら当分安心な



事、眩暈も嘔気はきけも皆無な事などを書き

連ねた。最後に先生の風邪ふうじゃについても

一言いちごんの見舞を附つけ加えた。私は先生の

風邪を實際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した

後で父や母と先生の噂うわさなどをしながら、

遥はるかに先生の書齋を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸しいたけでも

持って行ってお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸なぞを食うかしら」

「旨うまくはないが、別に嫌きらいな人もない  
だろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考  
えるのが変であつた。

先生の返事が来た時、私はちよつと  
驚かされた。ことにその内容が特別の

用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙に

は相違なかつたが。

第一というと私と先生の間に書信の往復がたびたびあつたように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わっておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰<sup>もら</sup>つていな

い。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛<sup>あて</sup>で書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外<sup>そと</sup>へは出なかつた。

一度天氣のごく穏やかな日の午後庭へ  
下りた事があるが、その時は万一を  
氣遣<sup>きづ</sup>つて、私が引き添<sup>そ</sup>うように傍<sup>そば</sup>に付  
いていた。私が心配して自分の肩へ手  
を掛けさせようとしても、父は笑つて  
応じなかつた。

## 二十三

わたくし

私は退屈な父の相手としてよく

しょうぎばん

将碁盤に向かった。二人とも無精な

たち

性質なので、炬燵こたつにあたたまま、盤

やぐら

を櫓やぐらの上へ載のせて、駒こまを動かすたびに、

かけふとん

わざわざ手を掛蒲団かけふとんの下から出すよう



な事をした。時々持駒もちづまを失くして、次

の勝負の来るまで双方とも知らずにい

たりした。それを母が灰の中から見付みつ

け出して、火箸ひばしで挟み上げるという

滑稽こっけいもあつた。

「碁ごだと盤が高過ぎる上に、足が着い

ているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好<sup>い</sup>いね、こうして楽に差せるから。無精者には持つて来いだ。もう一番やろう」

父は勝った時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、も

う一番やろうといった。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍しいので、この隠居いんきよじみた娯樂が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経たつに伴っれて、若い私の氣力は

そのくらいな刺戟しげきで満足できなくなつた。私は金きんや香車きやうしやを握にぎった拳こぶしを頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲みなぎる心臓の血潮の奥に、活動活動と打ち

つづける鼓動こどうを聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、

生きてゐるか死んでゐるか分らないほ

おとな

ど大人しい男であつた。他に認められ

ひと

るという点からいえばどつちも零であ

れい

つた。それでいて、この将碁を差した

がる父は、単なる娯樂の相手としても

私には物足りなかつた。かつて遊興の

ために往来ゆききをした覚えおぼのない先生は、

歡樂の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ

頭というのはあまりに冷ひややか過ぎるか

ら、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰くい込んでいるといつて

も、血のなかに先生の命が流れている  
といつても、その時の私には少しも誇  
張でないように思われた。私は父が私  
の本当の父であり、先生はまたいうま  
でもなく、あかの他人であるという明  
白な事実を、ことさらに眼の前に並べ



てみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかつた私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験す

る心持だろうと思うが、当座の一週間  
ぐらいは下にも置かないように、ちや  
ほや歓待もてなされるのに、その峠を定規通ていきどお  
り通り越すと、あとはそろそろ家族の  
熱が冷めて来て、しまいには有つても  
無くつても構わないもののように粗末

に取り扱われがちになるものである。

私も滞在中にその峠を通り越した。そ

の上私は国へ帰るたびに、父にも母に

も解<sup>わか</sup>らない変なところを東京から持つ

て帰った。昔でいうと、儒者<sup>じゆしや</sup>の家へ

切支丹<sup>キリシタン</sup>の臭い<sup>にお</sup>を持ち込むように、私の

持つて帰るものは父とも母とも調和し  
なかつた。無論私はそれを隠していた。  
けれども元々身に着いているものだから、  
出すまいと思つても、いつかそれ  
が父や母の眼に留とまつた。私はつい面  
白くなくなつた。早く東京へ帰りたく

なつた。

父の病氣は幸い現状維持のまままで、  
少しも悪い方へ進む模様は見えなかつ  
た。念のためにわざわざ遠くから相当  
の医者をお願いしたりして、慎重に診察し  
てもらつてもやはり私の知っている以

外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろ  
う」と父がいった。

私は自分の極めた出立しゅったつの日を動かさ  
なかつた。

## 二十四

東京へ帰ってみると、まつかざり松飾はいつか

取り払われていた。町は寒い風の吹く  
に任せて、どこを見てもこれというほ  
どの正月めいた景気はなかった。

わたくし さっそく

私は早速先生のうちへ金を返しに行

しいたけ

った。例の椎茸もついでに持って行っ

た。ただ出すのは少し変だから、母が



これを差し上げてくれといいましたと  
わざわざ断つて奥さんの前へ置いた。

椎茸は新しい菓子折に入れてあつた。

鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へていねい  
ま

立つ時、その折を持って見て、軽い  
のに驚かされたのか、「こりや何の

御菓子<sup>おかし</sup>」と聞いた。奥さんは懇意にな

ると、こんなところに極<sup>きわ</sup>めて淡泊<sup>たんぱく</sup>な

小供<sup>こども</sup>らしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々

掛念<sup>けねん</sup>の問いを繰り返してくれた中に、

先生はこんな事をいった。

「なるほど容体ようたいを聞くと、今が今どう

という事もないようですが、病気が病  
気だからよほど気をつけないといけま  
せん」

先生は腎臓じんぞうの病やまいについて私の知らな  
い事を多く知っていた。

「自分で病気に罹かかっていながら、気が

付かないで平気でいるのがあの病の特

色です。私の知ったある士官しかんは、とう

とうそれでやられたが、全く嘘うそのよう

な死に方をしたんですよ。何しろ傍そばに

寝さいていた細君くんが看病をする暇もなんに

もないくらいなんですからね。夜中に  
ちよつと苦しいといつて、細君を起し  
たぎり、翌あくる朝はもう死んでいたんで  
す。しかも細君は夫が寝ているとばか  
り思つてたんだつていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に

不安になつた。

「私の父もそんなになるでしようか。  
おやし

ならんともいえないですね」

「医者は何というのです」

「医者は到底治らないといふんです。  
とても

けれども当分のところ心配はあるまい

ともいうんです」

「それじゃ好いでしよう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かず  
にいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の変化を凝<sup>じっ</sup>と

見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしろ病気にしろ、どつちにしても脆もろいものです。いつどんな事でどんな死にようをしないと  
も限らないから」



「先生もそんな事を考えてお出いでで  
すか」

「いくら丈夫の私でも、満まんざら更考えない  
事もあります」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃあり

ませんか。自然に。それからあつと思  
う間まに死ぬ人もあるでしょう。不自然  
な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解わからないが、自  
殺する人はみんな不自然な暴力を使う

んでしよう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭かげですね」

「殺される方はちつとも考えていなか  
った。なるほどそういえばそうだ」

その日はそれで帰った。帰ってから

も父の病気はそれほど苦にならなかつた。先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、  
あと後は何らのこだわりを私の頭に残さなかつた。  
いくたび私は今まで幾度か手を着けよ

うとしては手を引つ込めた卒業論文を、  
いよいよ本式に書き始めなければなら  
ないと思い出した。

## 二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、  
ぜひともこの論文を成規通り四月いっ  
せいきどお  
わたくし

ばいに書き上げてしまわなければなら  
なかつた。二、三、四と指を折つて余  
る時日を勘定して見た時、私は少し自  
分の度胸を疑<sup>うたぐ</sup>つた。他<sup>ほか</sup>のものはよほど  
前から材料を蒐<sup>あつ</sup>めたり、ノートを溜<sup>た</sup>め  
たりして、余<sup>よ</sup>所<sup>そ</sup>目<sup>め</sup>にも忙<sup>いそ</sup>し<sup>が</sup>そうに見え

るのに、私だけはまだ何にも手を着けず  
にいた。私にはただ年が改まったら  
大いにやろうという決心だけがあつた。

私はその決心でやり出した。そうして

たちま

忽ち動けなくなつた。今まで大きな問

題を空くうに描えがいて、骨組みだけはほぼで

おさ

き上っているくらいに考えていた私は、  
頭を抑えて悩み始めた。私はそれから  
論文の問題を小さくした。そうして練  
り上げた思想を系統的に纏める<sup>まと</sup>手数を  
省くために、ただ書物の中にある材料  
を並べて、それに相当な結論をちよつ



と付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁  
故の近いものであつた。私がかつてそ  
の選択について先生の意見を尋ねた時、  
先生は好<sup>い</sup>いでしようといつた。狼<sup>ろう</sup>狽<sup>ばい</sup>し

た気味の私は、<sup>さつそく</sup>早速先生の所へ出掛け

て、私の読まなければならぬ参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうと  
いった。しかし先生はこの点について  
毫ごうも私を指導する任に当ろうとしな

った。

ちかごろ

「近頃はあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であつたが、その後ごという訳か、前ほどの方面

に興味が働かなくなつたようだと、か  
つて奥さんから聞いた事があるのを、  
私はその時ふと思い出した。私は論文  
をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味を  
もち得ないんですか」

「なぜという訳もありませんが。……  
つまりいくら本を読んでもそれほどえ  
らくならないと思うせいでしょう。そ  
れから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもない

が、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないと恥のようにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気

が出なくなつたのでしよう。まあ早く  
いえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。

世間に背中を向けた人の苦味くみを帯びて

いなかっただけに、私にはそれほど

手て応こたえもなかつた。私は先生を老い込

んだとも思わない代りに、偉いとも感  
心せずに帰った。

それからの私はほとんど論文に崇<sup>た</sup>ら

れた精神病者のように眼を赤くして苦

しんだ。私は一年前<sup>ぜん</sup>に卒業した友達に

ついて、色々様子を聞いてみたりした。



いちにん

しめきり

そのうちの一人は締切の日に車で事務

か

ようや

所へ馳けつけて漸く間に合わせたとい

った。他の一人は五時を十五分ほど後

おく

あやう

は

らして持つて行つたため、危く跳ね付

けられようとしたところを、主任教授

の好意でやつと受理してもらつたとい

った。私は不安を感じると共に度胸を  
据<sup>す</sup>えた。毎日机の前で精根のつづく限  
り働いた。でなければ、薄暗い書庫に  
はいつて、高い本棚のあちらこちらを  
見廻<sup>みまわ</sup>した。私の眼は好事家<sup>こうずか</sup>が骨董<sup>こつとう</sup>でも  
掘り出す時のように背表紙の金文字を

あさった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向をむき

南へ更<sup>か</sup>えて行つた。それが一仕切経<sup>ひとしきり</sup>つ

と、桜の噂<sup>うわさ</sup>がちらほら私の耳に聞こえ

出した。それでも私は馬車馬のように

正面ばかり見て、論文に鞭<sup>むち</sup>うたれた。

私はついに四月の下旬が来て、やっと  
予定通りのものを書き上げるまで、先  
生の敷居を跨またがなかつた。

## 二十六

私わたくしの自由になつたのは、  
八重桜やえざくらの散  
つた枝にいつしか青い葉が霞かすむように

伸び始める初夏の季節であつた。私は

籠かごを抜け出した小鳥の心をもつて、広

い天地を一目ひとめに見渡しながら、自由に

羽搏はばたきをした。私はすぐ先生の家うちへ行

つた。枳殼からたちの垣が黒ずんだ枝の上に、

萌もえるような芽を吹いていたり、柘榴ざくろの

枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそうに日光を映していたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉しうれしそうな私の顔を見て、

「もう論文は片付いたんですか、結構  
ですね」といった。私は「お蔭かげでよう  
やく済みました。もう何にもする事は  
ありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべき  
すべての仕事けつりようがすでに結了して、これ

から先は威張って遊んでいても構わな  
いような晴やかな心持でいた。私は書  
き上げた自分の論文に対して充分の自  
信と満足をもっていた。私は先生の前  
で、しきりにその内容を喋々ちようちようした。先  
生はいつもの調子で、「なるほど」と



か、「そうですか」とかいつてくれた  
が、それ以上の批評は少しも加えな  
かった。私は物足りないというよりも、

聊いささかか拍子抜けの気味であつた。それで

もその日私の気力は、因循いんじゆんらしく見え

る先生の態度に逆襲を試みるほどに

いきいき

生々いきいきしていた。私は青く蘇よみがえ生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変い好い心持です」

「どこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴っれて郊外へ出たかった。

一時間の後、のち先生と私は目的どおり

市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛あてもなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉をぎ取

しばぶえ

って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人<sup>かごしまじん</sup>を

まね

友達にもって、その人の真似をしつつ

自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖とざされたように蒨こん鬱もり

した小高い一構ひとかまえの下に細い路みちが開ひらけ

た。門の柱に打ち付けた標札に何々園

とあるので、その個人の邸宅でない事

がすぐ知れた。先生はだらだら上のぼりに

なっている入口を眺<sup>なが</sup>めて、「はいって  
みようか」といった。私はすぐ「植木  
屋ですね」と答えた。

植込<sup>うえこみ</sup>の中を<sup>ひと</sup>一うねりして奥へ上ると<sup>のぼ</sup>

左側に家<sup>うち</sup>があつた。明け放<sup>しょうじ</sup>つた障子の

内はがらんとして人の影も見えなかつ

た。ただ軒先のきりぎりに据えた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつでも構わないだろうか」

「構わないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかし

そこにも人影は見えなかった。躑躅つつじが

燃えるように咲き乱れていた。先生は

そのうちで樺色かばいろの丈たけの高いのを指して、

「これは霧島きりしまでしょう」といった。

芍薬しやくやくも十坪とつぽあまり一面に植え付けら

れていたが、まだ季節が来ないので花



を着けているのは一本もなかった。こ

の芍薬畠ばたけの傍そばにある古びた縁台のよう

なものの上に先生は大の字なりに寝た。

私はその余った端はじの方に腰をおろして

烟草タバコを吹かした。先生は蒼あおい透すき徹とおる

ような空を見ていた。私は私を包む若

葉の色に心を奪われていた。その若葉  
の色をよくよく眺ながめると、一々違つて  
いた。同じ楓かえでの樹きでも同じ色を枝に着  
けているものは一つもなかった。細い  
杉苗の頂いただきに投げ被かぶせてあつた先生の帽  
子が風に吹かれて落ちた。

## 二十七

わたくし

私はすぐその帽子を取り上げた。

ところどころ

所々に着いている赤土を爪つめで弾はじきなが

ら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

身体からだを半分起してそれを受け取った

先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家うちには財産がよつぽどあるんですか」

「あるというほどありやしません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼の  
ようだが」

「どのくらいいつて、山と田地でんちが少しあ  
るぎりで、金なんかまるでないんで  
しょう」

先生が私の家の経済について、問

いえ

らしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた。私の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑つ

うたぐ

た。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな

露骨な問題<sup>あらわ</sup>を先生の前に持ち出すのを

ぶしつけとばかり思つていつでも控え  
ていた。若葉の色で疲れた眼を休ませ  
ていた私の心は、偶然またその疑いに

触れた。

「先生はなんですか。どのくらいの財産をもっているんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なりをしていた。それに家内かないは小人こにんず数であつ



た。したがって住宅も決して広くはな  
かった。けれどもその生活の物質的に  
豊かな事は、内輪にはいり込まない私  
の眼にさえ明らかであつた。要するに  
先生の暮しは贅沢ぜいたくといえないまでも、  
あたじけなく切り詰めた無弾力性のも

のではなかった。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりゃそのくらいの金はあるさ、  
けれども決して財産家じゃありません。  
財産家ならもつと大きな家うちでも造  
るさ」

この時先生は起き上つて、縁台の上にあぐら胡坐をかいていたが、こういう終ると、竹の杖の先で地面の上へ円つえのようなものを描かき始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直まっすぐに立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとごとのようであ

った。それですぐ後あとに尾ついて行き損な

った私は、つい黙っていた。

「これでも元は財産家なんですよ、

君」といい直した先生は、次に私の顔

を見て微笑した。私はそれでも何とも  
答えなかった。むしろ不調法で答えら  
れなかったのである。すると先生がま  
た問題を他へ移した。よそ

「あなたのお父さんの病気はその後ど  
うなりました」

私は父の病氣について正月以後何にも知らなかった。月々国から送ってくる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟しゆせきであつたが、病氣の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この

種の病人に見る顫えふるが少しも筆の運びはこを乱していなかった。

「何ともいつて来ませんが、もう好いい  
んでしよう」

「好よければ結構だが、——病症が病症  
なんだからね」

「やっぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合ってるんでしょう。何ともいつて来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いた  
り、私の父の病気を尋ねたりするのを、



普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思って聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかった。

## 二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらっておかないと、始末をつけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰<sup>もら</sup>うものはちゃんと貰ってお

くようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

わたくし

私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心配をし

ているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられる  
のを、今から予想してかかるような  
言葉遣いことばづかをするのが気に触さわったら許し  
てくれたまえ。しかし人間は死ぬもの  
だからね。どんなに達者なものでも、  
いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口気こうきは珍しく苦々しかつた。

「そんな事をちつとも気に掛けちやい  
ません」と私は弁解した。

「君の兄弟きょうだいは何人でしたかね」と先生  
が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数にんずを聞

いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父<sup>おじ</sup>や叔母<sup>おば</sup>の様子を問いなどした。そうして最後にこういった。

「みんな善い<sup>い</sup>人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもない<sup>いなかもの</sup>ようです。大抵田舎者<sup>いなかもの</sup>ですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮ついきゆうに苦しんだ。しかし先

生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君



は今、君の親戚しんせきなぞのうち中に、これとい

って、悪い人間はいないようだといい

ましたね。しかし悪い人間という一種

の人間が世の中にあると君は思ってい

るんですか。そんな鑄型いかにに入れたよう

な悪人は世の中にあるはずがありません

んよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。

それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」

先生のいう事は、ここで切れる様子

もなかった。私はまたここで何かいおうとした。すると後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍に、熊笹が三坪ほど地

を隠すように茂つて生えていた。犬は  
その顔と背を熊笹の上に現わして、盛  
んに吠え立てた。そこへ十とおぐらいの  
小供こどもが馳かけて来て犬を叱しかり付けた。小  
供は徽章きしょうの着いた黒い帽子を被かぶったま  
ま先生の前へ廻まわつて礼をした。

「叔父さん、はいつて来る時、  
家うちに誰だれ

もいなかったかい」と聞いた。  
「誰もいなかったよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方に  
いたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日こんちはって、断つ

てはいって来ると好よかったのに」

先生は苦笑した。懐中ふところから墓口がまぐちを出

して、五銭の白銅はくどうを小供の手に握らせ  
た。

「おっかさんにそういつとくれ。少し

ここで休まして下さいって」

小供は<sup>りこう</sup>伶俐そうな眼に<sup>わら</sup>笑いを<sup>みなぎ</sup>漲らし

て、<sup>うなず</sup>首肯いて見せた。

「今<sup>せつこうちよう</sup>斥候長になつてるところなん  
だよ」

小供はこう断つて、<sup>つつじ</sup>躑躅の間を下の

方へ駈け下りて行つた。犬も尻尾しつぽを高  
く巻いて小供の後を追ひ掛けた。しば  
らくすると同じくらいの年格好の小供  
が二、三人、これも斥候長の下りて行  
つた方へ駈けていった。

私は妻さいを残して行きます。私がいな



くなつても妻に衣食住の心配がないの

は仕合しあわせです。私は妻に残酷な驚怖きょうふを

与える事を好みません。私は妻に血の

色を見せないで死ぬつもりです。妻の

知らない間まに、こつそりこの世からい

なくなるようにします。私は死んだ後

で、妻から頓死とんししたと思われたいので  
す。気が狂ったと思われても満足な  
です。

私が死のうと決心してから、もう十  
日以上になりますが、その大部分はあ  
なたにこの長い自叙伝の一節を書き残

すために使用されたものと思つて下さ  
い。始めはあなたに会つて話をする気  
でいたのですが、書いてみると、かえ  
つてその方が自分を判然はつきり描き出す事が  
できたような心持がして嬉しいうれのです。  
私は酔興すいこうに書くのではありません。私

を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとっても、外の人にとっても、徒労ではなからう

と思います。渡辺華山は邯鄲わたなべかざん かんたんという画え

を描かくために、死期を一週間繰り延べ

たという話をつい先達せんだつて聞きました。

他ひとから見たら余計な事のようにも解釈

できましようが、当人にはまた当人相

応の要求が心の中うちにあるのだからやむ

をえないともいわれるでしょう。私の  
努力も単にあなたに対する約束を果た  
すためばかりではありません。半ば<sup>なか</sup>以  
上は自分自身の要求に動かされた結果  
なのです。

しかし私は今その要求を果たしまし

た。もう何にもする事はありません。

この手紙があなたの手に落ちる頃には、  
私はもうこの世にはいないでしょう。

とくに死んでいるでしょう。妻は十日  
ばかり前から市ヶ谷いちがやの叔母おばの所へ行き  
ました。叔母が病気で手が足りないと

いうから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、あいだこの長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他ひとの参考に供するつもりです。しかし妻だけは



たった一人の例外だと承知して下さい。  
私は妻には何にも知らせたくないの  
す。妻が己<sup>おの</sup>れの過去に対してもつ記憶  
を、なるべく純白に保存しておいてや  
りたいのが私の唯一<sup>ゆいいつ</sup>の希望なのです  
か、私が死んだ後<sup>あと</sup>でも、妻が生きてい

る以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」

---

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年2月25日第

一刷

1995（平成7）年6月14日第

10刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8

月11日

※誤植の修正は「漱石全集」岩波書店  
を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに  
用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大  
振りにつくっています。

入力：j.utiyaana

校正：伊藤時也

1999年7月31日公開

2010年10月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

## ●表記について

このファイルは W3C 勧告

XHTML.1 にそった形式で作成されています。「#：」は、入力者による注を表す記号です。「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

---

# ● 図書カード